

## 並立関係をもつ合成語の特徴

### —二構成要素での結合関係を中心に—

飯田寿子

キーワード 結合関係 結合力 構成要素 特定度 並立合成語

#### 要 旨

並立関係をもつ合成語は、構成要素間の関係を文法的な側面からも解釈できるのかどうか検討するために、特に二構成要素（「男女」「上り下り」等）からなる並立合成語内に助辞を挿入させ、合成語が成立するか調査した。その結果、九種類の類型があることを確認した。これら結合類型が存在する理由のひとつとして、結合力と特定度の相関程度で差異が発生し、種々の結合類型を形成させた結論づける。

#### 1. 0 並立関係をもつ合成語とは —調査の目的と先行研究—

##### 1. 1 目的

合成語における結合関係のなかで、「雨降り」「山登り」といった主述・補足関係や「立ちかける」「追いつく」等の修飾・補助関係についての研究はかなり活発である。なぜならばこれらの関係は、統語論の研究を基礎にして文法的な側面から考えることができるからである。本稿が対象とする並立関係、つまり「勝ち負け」「父母」等は、参考となる統語論の分野がこれからの分野であるためか、文法的な側面からみた合成語における結合関係の研究はかなり少ない。このことは全体的な合成語数からみて、主述・補足関係等の合成語数よりも並立関係の合成語数が少ないため、注目されにくいという一因もあるからだと思われる<sup>1</sup>。

しかしながら並立関係をもつ合成語（以下、並立合成語と略する）は数こそ少ないが、慣用句のようにひとつひとつ暗記しなくてはいけないほど特殊な語形ではなく、数量もまた固定されていない。そうすると他の結合関係と同様に、並立合成語も結合するときに何らかの結合条件が存在して、その結合条件と適合したものが合成語化すると思われる。そこで本稿は文法的側面を中心に結合関係を調

査する。そして得られた結合関係の種類がどのような特徴を並立合成語に与えるのか、明らかにすることを目的とする。

## 1. 2 先行研究

並立合成語の先行研究として斎賀(1957)や玉村(1985)がある。斎賀(1957)は語結合の意味的關係の一類に「前部分と後部分とが対等の資格で並立する関係」をたて、それを並立関係とした。その並立関係を意味的關係が一義か否かによってまず分類し、その下位に語結合別を設ける。前者は「同義語・類義語による一義形成」から成立する関係で、「意義の共通する語、または意義の相似た語を重ねて、その意義をさらに明確にし、あるいは二つの概念を総合した意を表す」とする。後者は「類義語・対義語の並列対照」で成立する関係で「意義の同じ範疇に属する語、又は意義の相反して対立する語を並べて、比較対照または累加する意を表す」ものである。

玉村(1985)では「複合語のうち、語を構成する成分が互いに対等の資格で並列しているものを並列構造（等位構造）といっ」ている。そして並列がどのような成分によるのかで分類し、その下位に品詞分類や語種別を行なう。つまり類義成分を並列させたものと、対義成分を並列させたものに分ける方法である。

両者とも類義または対義等で結合する合成語は並立関係・並列構造であるとし、それらは「対等の資格」を有すると認める。しかしいずれにしても結合関係からみると玉村(1985)は、類義や対義といった構成要素中の意味の組み合わせまでで分類を留めている。また斎賀(1957)は結合関係にも触れるが、構成要素の対比まででそれ以上の言及はない。

## 1. 3 調査対象および方法

そこで本稿はどのような類義や対義関係にある構成要素の組み合わせがあるかという立場から考察するのではなく、文法的側面からみて並立合成語の結合関係に何らかの種類および特徴があるか考察を行なう。調査対象として合成名詞、特に二つの構成要素からなる並立関係<sup>2)</sup>に絞り、『分類語彙表』を中心に『新明解国語辞典第四版』『日本語逆引き辞典』の見出し語を採取する。先行研究より「対等の資格」をもつ構成要素であることが前提にあり、その条件に適合する構成要素は類義または対義関係の組み合わせであるとするので、その認否はおよそ内省にしたがった。そのため不安に思う構成については『反対語辞典』『角川類語辞典』『反対語対照語辞典』『新字源』を参考にした。なお第2節以降の例文は作例である。また「\*」が左肩についている用例は容認不可とし、「?」は容認が疑

わしいか、もしくはゆれがあると内省判断をしている。

並立合成語の結合関係を分類する方法ならびに基準は、構成要素間または構成要素の後方に助辞を挿入して、合成語が成立するかどうかで確認する。なお、本稿の構成要素とは合成語等を構成するために必要な語の成員を指す。

## 2. 0 結合関係の種類と特徴

調査結果から、結合関係は最初に構成要素が等しく結合するかどうかで分類することができ、1.均衡性がある 2.偏向性がある 3.均衡と偏向の境界にある の三類が存在する。そして三類それぞれに下位があり、並立関係全体では九種の範疇を認める。以下、その範疇を順次列挙し、特徴を述べる。また典型的であると思われる例も付記する。

### 2. 1 結合関係に均衡性がある場合—助辞挿入が可能な関係—

先行研究も述べるように、並立合成語の規定は各構成要素が「対等の資格」をもつことが前提であるので、助辞はその条件に適合するものが選択される。助辞が選択挿入できるということは、結合関係が安定しており構成要素が均衡していることも意味する。結合関係は次の五種類が確認できる。

#### 2. 1. 1 対等結合—「と」「そして」が挿入できる場合 —

構成要素を羅列のみで結合した合成語を対等結合とする。ここに相当する構成要素は、この結合の条件に適する成員全てを列挙していると考ええる。たとえば(1)は「木の葉」が「裏」と「表」の二面があることを指しており、(2)は「心」という漢字一つに「シン」「ココロ」の二つの読みがあることを表す。

(1) 木の葉には、裏表がある。

(2) 「心」の漢字には、「シン」と「ココロ」の音訓がある。

このように語と語が名詞句をつくる際と同じように、語と語が並立合成語化した後でも構成要素の語形と意味が一致する。ここに該当する並立合成語は、構成要素間に「と」が、「そして」「それから」等が挿入できる。(3)は対等結合に該当する並立合成語である。

(3) 凹凸 晴雨 内外 文武 鳳凰

#### 2. 1. 2 例示結合—「や」が挿入できる場合 —

構成要素は並立関係の一部を代表したものであり、他の構成要素もあることを暗示させる結合関係が例示結合である<sup>3)</sup>。(4)の牛や馬は人間にとって都合よく働く家畜の代表である。人間に対してよく働く動物として認めることができるなら、ロバや犬でも本来ならば可能である。また(5)では代表として神や仏を提示

しているものであり、神仏と同等の信仰対象として認められているものであれば、必ずしも神仏でなくても可能である。

(4)花子は毎日、生馬のように使われた。

(5)太郎は毎朝、神仏に祈ります。

このように対等結合や次項で述べる選択結合の構成要素が成員全ての羅列列挙であったり、構成要素の選択を迫るための成員を「閉じられた集合の成員」と考えるならば、例示結合の構成要素は全てを見せていないので「開かれた集合の成員」として考えることができる。また例示結合の構成要素間には「や」等が挿入できる場合が相当する。(6)は例示結合に該当する並立合成語である。

(6) 山河 年月 風雨 弓矢 恋愛

## 2. 1. 3 選択結合—「か」「または」が挿入できる場合 —

構成要素は羅列することを要求しているのではなく、どちらか一方を選択させる結合関係が選択結合である。そして一方が成立しなかった場合は、未選択側の構成要素が代替する置換性をもっている。だから最初に採用されなくも、未選択側は消去されるわけではないので、「帯説」(2. 2で述べる)とは異なる。(7)は病気によって「生」でなければ「死」、もしくは「死」でなければ「生」という二者択一で選択する状況に追い込まれたことを表わす。例示結合のように他の構成要素は含まれない。だからこの場合「わからない」という選択肢は用意されていない。(8)の「けじめをつけること」は「善」か「悪」か二者択一で判断させる行為をすることである。よって「善」でも「悪」でもない「中くらい」は想定されていない。

(7)花子は、病気で生死をさまよった。

(8)太郎は、善悪のけじめをつけることができない。

構成要素間には「か」「または」等が優先的に挿入できる場合がここに相当する。(9)は選択結合に該当する並立合成語である。

(9) 右左 適否 天地 問答 夢うつつ

## 2. 1. 4 反転結合—「たり」が挿入できる場合 —

ここの構成要素は、同時に存在することよりも交替しあうことで結合関係を見出す、いわば反転結合である。(10)は数年かけて病院に行って戻ってくるのではなく、病院と家の間を何度も繰り返し歩行する。また普通に考えると太郎本人は一人しかいないので、病院に行く太郎と病院から戻る太郎が同時刻に存在することはできない。どちらかの動作しかできないのである。(11)は開いたまま、もし

くは閉じたままのドアの状態ではない。部屋に人が出入りするたびに、ドアがその状態を反復し続けるのである。

(10)ここ数年太郎は、病院と家の間を行き来している。

(11)この部屋にいる人は、ドアの開閉に注意してください。

このように反転結合は一見すると選択結合となんら変わりがないようにみえる。確かに選択結合にも交替性があるが、反転結合の交替性とは質的に異なる。選択結合の場合は二者択一という選択肢が最初にあり予備があること、つまり剰余部分があることも内示する。しかし反転結合は交替することが重要なのであって、一方の構成要素は他方の構成要素の予備ではないのである。ここに相当する構成要素の後ろには「たり」が挿入することができる。(12)は反転結合に該当する並立合成語である。

(12) 煮炊き    上り下り    読み書き    離合    伸縮

## 2. 1. 5 共有結合—「も」が挿入できる場合—

例示結合の場合、構成要素は代表要素であり、他の構成要素の存在を暗示させる結合関係であった。それに対して共有結合は、先に条件に適する構成要素が数多くあることが前提にあり、そこから少なくともこの構成要素さえ列挙しておけば全体をおさえることができる結合関係である。(13)は服の穴が「ここ」「そこ」「あそこ」と視野に入るところ全てにあいている。けれども手前の「ここ」と手前ではない「そこ」を列挙するだけで、服の穴が全体に存在することを表わす。(14)は花子の健康の内容を考えると、花子自身の内側、つまり潜在的な問題と外側、つまり顕在的な状況がある。内側は「心」「気」「人間関係」等があり、外側は「頭」「身」「髪」等がある。その中から「心」「身」を列挙することで最少要件をおさえることができる、とするのである。

(13)この服は、穴がここそこにあいている。

(14)花子は、心身ともに健康である。

例示結合と共有結合は、構成要素が成員全ての羅列列挙ではなく代表であるという点では同じである。ところが例示結合は条件さえ合致すれば他の要素も成員化できるが、共有結合は最初に成員枠が存在する。そこで「開かれた集合の成員」が例示結合とするならば、共有結合は「限界をもつ開かれた集合の成員」として考えることができる。構成要素の後方に「も」が挿入できる場合がここに相当する。(15)は共有結合に該当する並立合成語である。

(15) 湖沼    人馬    隣近所    昼夜    老若

## 2. 2 結合関係に偏向性がある場合—助辞挿入が不可能な関係—

どの助辞の挿入が可能かで結合関係の特徴を見出すことはさほど困難な作業ではない。しかしその一方で構成要素に助辞を挿入しても、結果として合成語と関連しにくい事例が少なくとも二つ考えることができる。

一つは構成要素間に助辞を挿入してもその並立合成語の意味にならない場合や、逆に並立合成語中に構成要素が認知できない場合がある。いわば複数以上の構成要素が融合して、新たな一つの構成要素へと変容したとも考えられる。これについては、調査した限りでは語例を採取することがほとんどできなかった<sup>4</sup>。もし存在するなら「なべ」や「みなと」のように、一語として認知している可能性がある。このような結合関係を融合結合としておく。

もう一つは構成要素が形式的に結合しているだけであり、並立合成語の意味は片側の構成要素だけの意味である場合（もしくは他方の構成要素だけの意味である場合）がある。このような付属的な結合関係には「帶説」という呼称がある。山田（1940）の「意義相反する語を合せて、下なる語又は上なる語をその場合主たるものなりと限定するものあり。たとえば 緩急（これは「急に」の意に用ゐるなり）の如し。かくの如きを帶説といへり。」である。（16）の下線で記した説明がこの帶説に該当する。（『新明解国語辞典第4版』より）なお本稿では、合成語化すると片側の構成要素が優勢になるので、優勢結合と称する。

（16）「多少」①多いか少ないか。

②(副)その量・程度などが、それほど多くないことを表わす。  
いくらか。

この結合関係にある並立合成語も数が少なく、存在しても他の結合関係からの派生のように思えるであろう。前節でみた結合関係が「対等の資格」という構成要素に課せられた条件によって均衡性を維持するならば、結合関係を超えて融合したり構成要素に優勢性を付加させたりするこれら二種は、偏向性が強い結合関係であるということができる。

## 2. 3 結合関係に均衡性と偏向性の境界面がみられる場合

並立合成語の結合関係は均衡性と偏向性できれいに分割できるというわけではなく、その中間に位置する結合関係をも認めることができる。

### 2. 3. 1 同定結合—「つまり」「すなわち」が挿入できる場合 —

同定結合は、形態上相違するけれども構成要素の意味をみると、重複・共通性や類似する部分がある関係の結合をさす。この結合は重複部分や共通部分が合成

語の基底になり、その他の部分が補完する側面もある。もっとも補完性は選択結合にもあるが、同定結合のように、選択結合の補完性は重複部分や共通部分を所有しながら補完するという性質ではない。(17)の「家屋敷」の構成要素や(18)の「陰影」の構成要素をみると、形態は異なっているけれども意味はほぼ同じである。だから「家屋敷」を「屋敷」だけにしても、「陰影」を「陰」に置換させても、住まいやカゲの意味が保持できるのである。

(17)このあたりは、大きな家屋敷が多い。

(18)太郎は、夕方になって陰影がついた窓辺にすわった。

ここに相当する合成語は、構成要素間に「つまり」「すなわち」等が挿入できる。(19)は同定結合に該当する並立合成語である。特に漢語の場合、構成要素を音読みしたとき音韻が異なるのだが、訓読みすると同じになることが多い。

(19) 映画 河川 山岳 思想 清冽

## 2. 3. 2 補充結合—「に」「ならば/とくると」が挿入できる場合—

対等結合は全ての構成要素を羅列し結合関係を統制しているが、補充結合の場合は結合関係が構成要素を統制する側にまわる。つまり結合することによって相互の構成要素の不足部分が補われ、並立関係が発生する結合関係が補充結合である。例えるならば芋と芋蔓の関係に類似する。芋の一つ一つが構成要素とすると、それをつなぐ芋蔓が結合関係に該当する。芋蔓がなければどの芋がどのようにして他の芋と繋がるのかわからなくなる。芋同士の関係は芋蔓があってこそ関連づけられるのである。ある構成要素を出すと連想で他の構成要素が続くという特徴は、因果関係とも類似する。

(20)は紅色と白色が交互に並んだ生地であり、(21)は高度を軸にした対義的な地形同士である。しかし「紅白」には「黒白」が、「山海」には「山河」が存在するので、因果関係からみた構成要素は必ずしも必要十分条件を満たすとは限らない。それゆえ補充結合は、慣習や慣例といった、その民族固有の文化的な概念からも影響をうける。

(20)花子は、体育館を紅白の幕で飾りつけた。

(21)牡鹿半島では、山海の珍味を食べることができる。

その点から考えると構成要素はお互いにかなり依存性が強く、対等性よりもむしろ密着性が高いと思われる。この結合関係は構成要素間に「に」が挿入できるか、もしくは「ならば/とくると」が優先的に挿入できる並立合成語が相当する。(22)は補充結合に該当する並立合成語である。

(22) 犬猫 つうかあ 弥次喜多 竜虎

ただ、ここに相当する並立合成語を見つけることはなかなか困難である。しかし(23a)のように句単位になると(慣用句を含め)採取が容易になる。

(23a) リンゴにミカン お茶にお菓子 歌に踊り 梅に鶯 猫に小判

(23b) \*リンゴミカン \*お茶お菓子/\*茶菓子 \*歌踊り \*梅鶯 \*猫小判

### 3. 0 並立合成語の体系

#### 3. 1 結合関係の分類と整理

ここで結合関係を整理すると(24)になる。

(24) 結合関係の分類表

合成語と構成要素の意味との強弱関係	結合で発生した構成要素の性質	結合関係の種類と判別基準に用いる助辞
均衡性 「対等の資格」 = 「結合すること」	羅列のみ	対等結合：～と～
↑ 「対等の資格」 ≥ 「結合すること」	代表させる [代表系]	例示結合：～や～
	置換できる [置換系]	共有結合：～も～も
		選択結合：～か～
		反転結合：～たり～たり
「対等の資格」 ≤ 「結合すること」	補填する [補填系]	同定結合：～つまり～
		補充結合：～に～
↓ 「対等の資格」 < 「結合すること」 偏向性	片側の構成要素が働く	優勢結合：助辞等の挿入は可能だが反映しない
	構成要素が分別不可能である	融合結合：無し

この中で純粹に「対等の資格」だけで構成要素が結合関係にあるものは、対等結合のみであると考ええる。なぜならば対等結合は羅列することが特徴であり、それ以外の結合関係は、構成要素自身がつ性質と構成要素間で働く結合しようとする力関係が相互に干渉することで結合関係の種類が発生するからである。

均衡性の強い結合関係とは構成要素間またはその後方に助辞挿入が可能な結合関係である。つまり構成要素という基底の上に結合関係が成立しているので助辞挿入が可能なのである。しかも挿入できる助辞によって四種類の結合関係に分類できることから、構成要素は何らかの性質を付していると考えられることもできる。この結合関係は構成要素の性質によって代表系と置換系に分けることができる。

代表系は、構成要素は合成語の要員、すなわち最低必要な因子であり、他にも構成要素があることを暗示するところに特徴がある。言い換えると、合成語化す



る構成要素以外の構成要素が背後に存在するため、合成語化した構成要素だけで特定できない部分がある、ということになる。そうすると背後にある構成要素を含めて検討しなければならない。それゆえ代表系は構成要素の特定度が弱いといえるだろう。ここの類には例示結合や共有結合が相当する。

その一方で代表系とは逆に、合成化した構成要素が全てである、すなわち特定している構成要素からなる結合関係がある。しかも合成語化したとき構成要素の一方が出現するときは他方が消失し、他方の構成要素が出現するときは一方が消失する、といった特定した構成要素内での置換が可能な関係でもある。このような特徴をもった構成要素で成立する結合関係を置換系とし、選択結合や反転結合が相当する。

偏向性の強い結合関係に目を向けると、融合結合や優勢結合は構成要素を有しているけれども、結合関係が「対等」に作用しているとは考えにくい。したがって構成要素と結合関係は必ずしも連携しているとは限らないということになる。ただし成立はしているが数量が限られている点に注意したい。またこれらの構成要素は特定していないと結合関係が成立しないので、構成要素の特定度が強いといえる。

均衡性と偏向性の連続面に存在する二つの結合関係のうち、同定結合は構成要素が重複または共通する面を、補充結合は構成要素が因果関係に類する面をもつので、構成要素がはたして並立関係にあるのか疑問が残る。しかしそれでも合成語上では並立関係を示す助辞の挿入が可能である。つまり語形は並立関係であるにも関わらず機能が破綻しているのである。破綻している機能に代わって、構成要素がその部分を補填する傾向にある結合関係を補填系として一括することができる。

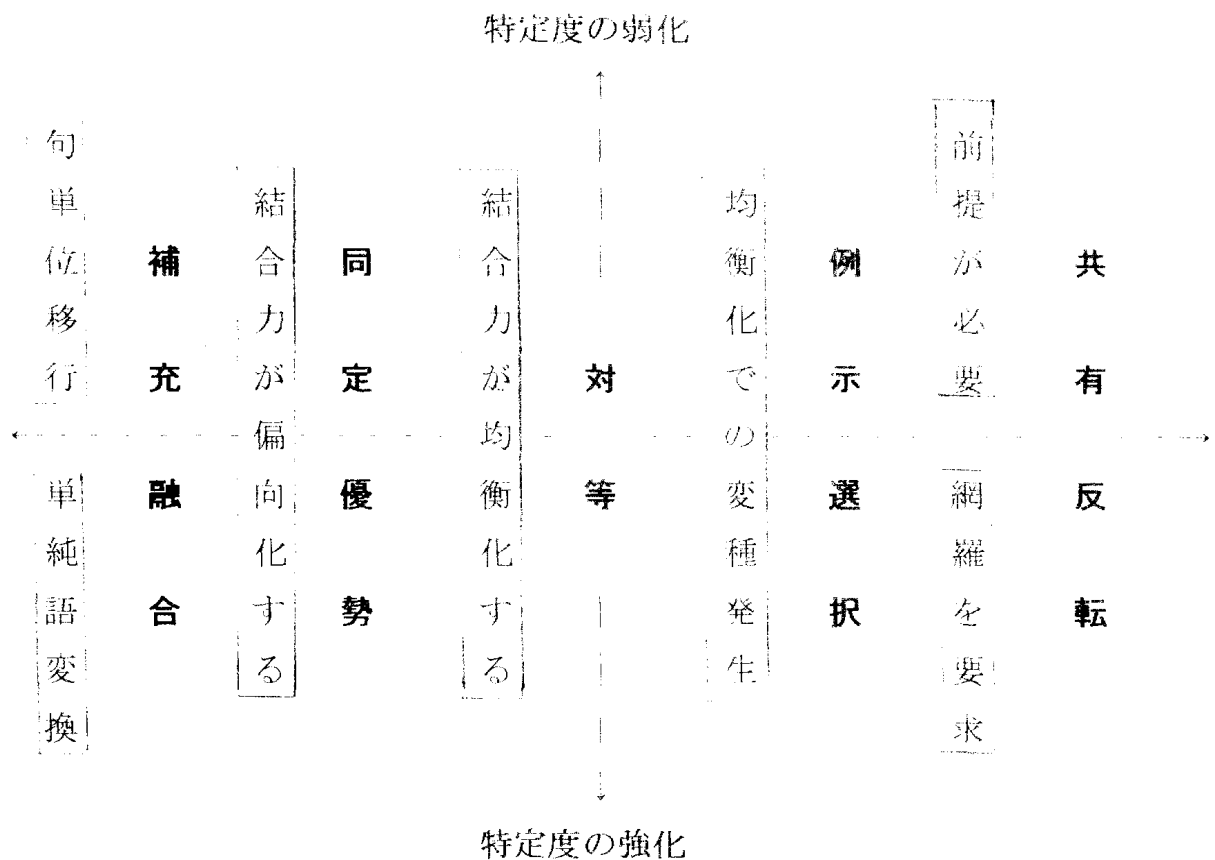
同定結合は、重複または共通する構成要素との結合が可能なので、同定結合に該当する合成語によって特定度が異なり、一様に考えることはできない。また置換系と比較すると置換系の構成要素は重複性等を伴うことがないことから、少なくとも置換系よりは構成要素の特定度が弱いことがわかる。また補充結合は、句での造語が多いわりには合成語では少ないので、こちらは構成要素の特定すること自体が困難であると推定できる。

このように結合関係の結合力と構成要素の特定度は固定されておらず、そのひとつひとつが連続体であることがわかる。つまり結合関係の結合力と構成要素の特定度が結合の種類に深く影響を与えることがわかる。

### 3. 2 結合の種類からみる並立合成語の体系—結合力と特定度の相関から—

そこで(24)を結合関係の結合力と構成要素の特定度を軸にして再構成すると(25)になる。中心、つまり対等結合側に近い結合類型は、どちらかという対等結合に類似し、外側の類型は各条件が強化する。そして(25)の外側にある結合類型は合成語数が少なく、特に左側の補充結合や融合結合は合成語が採取しにくい。結局、結合関係から考える並立合成語を成立させるには、1. 結合力が均衡に働くこと 2. ある程度特定できる構成要素にすること があれば可能である。

#### (25) 並立合成語の体系図—二構成要素の場合—

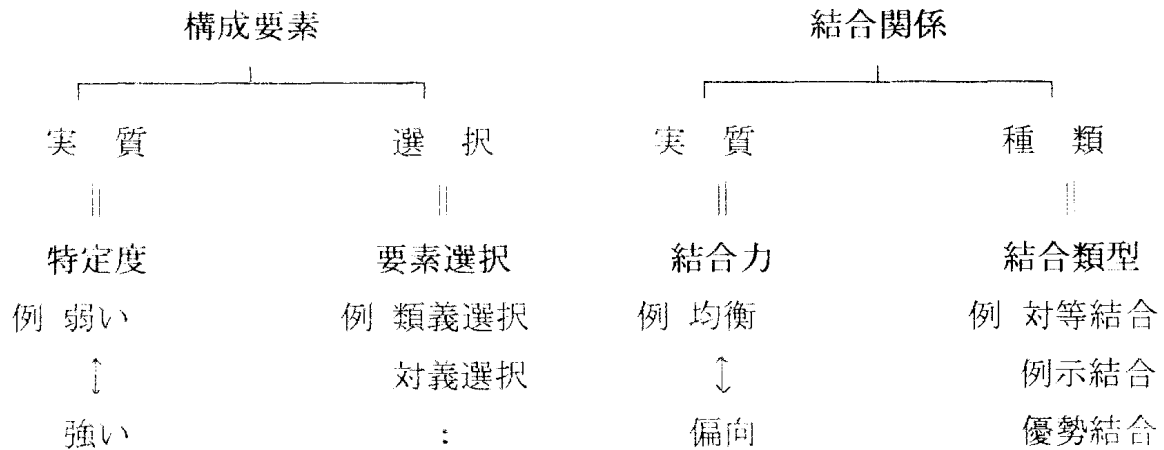


### 3. 3 結合関係と構成要素に関わる用語の整理

ここで構成要素と結合関係について少し整理しておく。「構成要素の特定度」とは表出している構成要素と潜在している構成要素の度合であり、いうならば「構成要素の実質」に関わる問題である。そして同時に「構成要素の実質」はどのような構成要素を特定選出したのかという「構成要素の選択」とは別である。また「結合関係の結合力」とは、構成要素間でどのような結合配分をするのか「結合関係の実質」に関わる面であり、結合化が確認された構成要素は「結合関係の種類」とする。なお「構成要素の選択」は「要素選択」、「結合関係の種類」は「結

合類型」と称する。これら四者を位置づけると(26)になる。

(26)結合に関わる四者の相違



そうすると「対等の資格」とは何をさすのか一考する問題が出現する。

### 3. 4 結合類型認定の難しさ

結合関係をとおして結合類型を体系化してきたけれども、実際の並立合成語はいずれかの結合類型に所属するというより、むしろそれぞれの結合類型を抱合する場合が多い。しかも並立合成語は場面や文脈によって、その状況に適合する結合類型を選択するのである。この場面ないし文脈によつて結合類型が決定するという、つまり状況依存度が強い側面は並立関係の特徴のひとつでもある。並立関係は(27a) (28a)の下線には「と」が、(27b) は「～と～／～や～／～か～」が、(28b)は「～と～／～や～／～も～も」等が挿入できる。

(27a) 太郎は、駅で一組の男女に道を尋ねた。

(27b) 太郎は、駅で数人の男女に道を尋ねた。

(28a) ここの寺前は、仁王像が左右に並んでいる。

(28b) ここの寺前は、露店が左右に並んでいる。

つまり並立における結合関係は助辞を最初に想定して合成語化したというより、結合関係の結合力と構成要素の特定度を相関させて合成語化したのである。だからここでの助辞は、結合関係を理解するための補助にしかすぎないのである。

### 注

<sup>1</sup> 『分類語彙表』『類語国語辞典』等の見出し語数からおおまかに把握ができる。

<sup>2</sup> 語種による構成要素の性質の違い（例えば和語語基と字音形態素との位置付け等）をどう考えるかという大きな問題がある。並立関係は（語順をどう扱うかという問題もあるが）語種に関係なく存在するが、その多くは同語種からなる合成語である。異なる語種同士からなる合成語、いわゆる混種語は少ない。本稿では語種による構成要素の性質と異語種間

における結合関係の問題は別の機会に論じることとする。

例) 和語語基 クサキ→草木 ヨルヒル→夜昼  
 字音形態素 ソウモク→草木 チュウヤ→昼夜  
 並立関係をもつ混種語 隣近所 家の子郎党 酒タバコ

③ 山田(1936)より「即ち先ず助詞「や」にて結合するものは、「月や雪や」は唯一色である。「柚や梨やなど」をもちてくひなどす。(中略)の例にて見る如くいずれも個々のものとして列挙する意味のものにして、しかもなほ他にあげざるものゝ存する意を言外に示せるもの多し。」と助詞「や」について述べる。

④ 「黄緑」「青白い」等の色彩系の語は新色が発生するという解釈もできるので、この結合に含めることができる。が、その数は極めて少ない。

また「うさぎうま」という単語が「ろば」を指すときは、この並立結合の一種であるとも考えることができる。

\*{うさぎ}と{うま}      \*{うさぎ}や{うま}      ?{うさぎ}か{うま}  
 ?{うさぎ}だったり{うま}だったり      →現実の動物は変身しない  
 ある部分は{うさぎ}、そしてある部分は{うま}      →部分が似ている→?融合

## 用例出典等

大野晋,浜西正人 1985『類語国語辞典』角川書店

小川環樹他編 1994『角川新字源 改訂版』角川書店

北原保雄,東郷吉男 1989『反対語対照語辞典』東京堂出版

金田一京助他編 1989『新明解国語辞典 第四版』三省堂

国立国語研究所 1964『分類語彙表』秀英出版

櫻井正信 1991『反対語辞典』日本文芸社

## 参考文献

安藤淑子 1995「日本語名詞及び動詞における並立表現の構造—開いた系と閉じた系—」『広島大学日本語教育学科紀要』5

国広哲弥 1967『構造的意味論』三省堂

斎賀秀夫 1957「語構成の特質」『講座現代国語学Ⅱ ことばの体系』筑摩書房

斎藤倫明 2000「語構成要素の有する意味について」『語から文章へ』私家版

田中章夫 1977「並立助詞と接続助詞」『岩波講座日本語7 文法Ⅱ』岩波書店

玉村文郎 1985『語彙の教育と教育(下)』大蔵省印刷局

寺村秀夫 1991『シンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

野村雅昭 1988「二字漢語の構造」『日本語学』7-5

森田良行 1988『日本語の類義表現』創拓社

森山卓郎 1995「並列述語構文考—「たり」「とか」「か」「なり」の意味用法をめぐって—」『複文の研究(上)』くろしお出版

山田孝雄 1936『日本文法学概論』宝文館

山田孝雄 1940『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館出版      —東北大学大学院生—